

データを活用したキャリア教育事例

大きなデータと身近なデータを組み合わせ 社会の事象を自分ごと化していく

松山聖陵高校（愛媛・私立）



（写真左）進路課 進路指導主事 情報科担当・宮崎幸弘先生、（写真中）進路課・大谷修一先生、（写真右）3年特進コース担任 物理科・渡部航幸先生

進路指導の根拠提示として 収集してきたデータの蓄積

普通科、自動車工学科、機械科、建築科を有し、卒業生の約7割が進学、3割が就職と多様な進路がある松山聖陵高校。進路課の大谷修一先生は同校に来るまで、のべ7校の公立高校で進路担当を経験してきた。生徒の進路指導や保護者会の場面で、時代の変化などの裏付け材料としてデータが役に立つと考え、多種多様な情報を収集、活用している。

「保護者の方々に対し、時代や今の大学、入試、就職環境がどう変わっているかを理解していただかねばなりません。

そのときに、18歳人口の推移や男女の賃金格差の変化など、保護者の時代とは異なるデータを見せたり、つかみとして保護者世代が高校生の頃からの流行語なども紹介すると、時代の変遷に興味をもって耳を傾けてもらえます」（大谷先生）

学校によって生徒の進路傾向が異なるため、異動するたびに求められるデータの種類は変わってくる。入試改革についても変更した背景や理由などを理解してもらうために、大学の定員厳格化、大学が受験生に求める力などの統計を使った解説が有効と語る。

「保護者と異なり、生徒たちには身近な大学や年代の話のほうが響きます。生徒向けには県内の大学の過去数年の合格率や、直近の話として生徒たちのきょうだいの時代のデータなどを見せると、自分ごととして捉えやすくなるようです」（大谷先生）

今では100以上のデータを常時収集（左ページ写真上）。ネットで更新されたデータを探だけでなく、欲しい情報が見つからなければ自ら問い合わせをキヤッチし、若手教員向けの進路研修会で活用法を共有している。

「データ収集・活用は仲間をつくって

進学・就職に直結するもの以外にも、進路選択に役立つデータは多彩に存在します。世の中のデータをキャリア教育に役立てている学校や先生に、どんなデータをどのように活用しているかお話を伺いました。

組織的に行うと、多様な視点が集まって面白くなると思います」（大谷先生）

自らアンケートを実施し 近隣企業の意向を知る

進路指導主事の宮崎幸弘先生は就職の支援も担当。高校生への求人数が急増するなか、同校の昨年度の有効求人倍率は28倍にもなった。

「売り手市場で生徒自身の興味関心に基づいてより選びやすくなっています。一方で『家から近いから』『知っている企業だから』という理由で志望企業を選ぶ生徒もいるので、多角的に企業を比較できる環境を整えています」（宮崎先生）

その一例として、求人票管理システムを導入し、いつでもどこでも自分のタブレットから求人票を見られるようにした。キーワード検索で職種や業種などから絞りこめるなど、膨大な求人情報から選びやすくなっている。先輩の入社試験体験談など身近なデータや情報も同時に見られる。

企業側の情報だけでなく、生徒が自分自身をデータで知るために適性検査ツールも活用している。

「データだけを鵜呑みにしないよう、

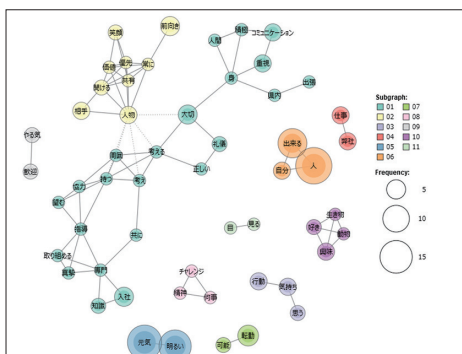
従来の面談の一環として活用しています。情報不足で安易な選択をする生徒がいる一方で、情報が多すぎて選択できない生徒もいます。データを参考にしながら本人が考えることが大切で、生徒自身が考える時間をつくるようにしています。教員はまず見守り、生徒の考えが行き詰まったときに声をかけするようにしています」（宮崎先生）

宮崎先生は外部の研修や会議などにも積極的に参加し、そこで入手したデータも活用。例えば、厚生労働省の産業別の求人数割合推移から、分野による動向や働き方の特徴の違いを理解し、進路指導にも役立てている。

さらに、愛媛の企業を対象に採用で重視することについてのアンケートを大谷先生と実施（左ページ写真中）。全国的なデータはあるものの、将来の就職先候補がどう考えているかのデータのほうが、生徒にとっては自分ごと化しやすいからだ。結果として、企業側は学力や取得資格以上に、協働性や誠実さ、責任感など人間性を重視していることを改めて認識する機会となり、知識・技能の習得よりも、その過程や課外活動を通して人間性を育成することの重要性について認識を新たにした。



(写真上)大谷先生が使用しているデータの一部。近隣大学の合格ラインなどのデータをはじめ、県外受験する生徒向けに全国の大学のデータも収集。大学別の合否分布の推移など、同じ大学の難易度の変化といった時系列のデータも多い。保護者の時代と現在の違いを説明するために人口動態や時代ごとの流行の変遷なども調べている。(写真中)宮崎先生が近隣の企業87社に、採用で重視することについてアンケート調査した結果。わかりやすくバブルチャートで可視化している。(写真下)データを有効活用しつつ、進路指導で重視しているのは従来通り生徒との面談。



データを使いながら 多面的に社会と自分を見る

特進コース担任の渡部紘幸先生は、個別最適な進路指導を心がけている。そのために、生徒たちの模試の成績だけでなく、同校で志願者数が多い大学の合格者最低点・平均点・倍率など、6年分の数値を自作のデータベースで活用。「一人ひとりの生徒が必要とするデータを調べているうちに自然に蓄積されていき、自分でデータベースを作ったほうが使いやすいと思ったのです」(渡部先生)

3人の先生が共通して語るのは、進路指導の基本は生徒自身の「やりたいこと、できること、家族のアドバイス」に向き合う面談に重きがあることに変わりはないという点だ。各種のデータはあくまでも教員の指導の見直しや、迷

う生徒への参考として活用している。また、データがネガティブな課題を示唆するものであっても、生徒の意欲が湧くような伝え方に留意している。「模試の結果が志望校の合格最低基準に達していなかった場合でも、弱みではなく強みから『自分もがんばったらできる』と感じさせるように、項目の強調箇所を加工するなどしています」(大谷先生)

大切なのは、現実に行っていることとデータを紐づけ、生徒の今後の進路に関わる事象を多面的に考えることだと先生たちは語る。

進路を考えるにあたり、社会全体のことを知ったうえで、県内や近い年齢の先輩など身近なデータを見て自分に引きつけ、今の自分ならどうするかを生徒自身が考える一助になることを先生たちは期待している。

社会→身近なこと→生徒自身へと視点を寄せていく 松山聖陵高校のデータ活用法

進学、就職とも、社会の大きな流れのデータは保護者や生徒の視野を広げるきっかけとなる。一方で、生徒自身が自分ごととして進路を考えるためには、身近で起きていることのデータが有効。そして、自分自身を客観的に捉えるデータとすり合わせていく。

＼ 進学希望者 ／

世の中って
そうなる
ているのか...

18歳人口、大学進学率
推移、高校教育・大学入
試の変化、共通テスト平
均点など



社会の
データ



産業別の求人数・時代に
よる推移、公務員試験倍
率の変化など

今は〇〇業の
募集が
多いんだ

え! あの大学が
自分にも
ねえそう!?

四国の人口動態、愛媛の
進学率の推移、近隣大学
の合否分布の変化など



身近な
データ

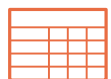


近隣企業が求める人物
像アンケート、先輩たち
の入社試験情報など

先輩たちの
体験談は
参考になる!

がんばれば
行けるかも!

志望大学の倍率、合格者
平均点、生徒自身の成
績・模試データなど



自分ごと



適性検査診断ツール、求
人票管理システムでの
志望企業のデータなど

自分の強みは
こういうこと
なんだ!